

お礼肥

土居 ヒサコ

母の介護のため故郷に戻ったのを機に自宅横の畑で家庭菜園を始めた。

〈一年目〉足腰は弱ったが頭はしっかりしている母を師匠に玉葱の苗を植えた。途中、草取りをするくらいの手間しかかけなかったが、土の力は凄いものだ。春には見事な収穫ができた。これに味をしめてナスやキュウリも植えてみた。これも大成功。食べきれないほどの実を次々につけてくれた。

〈二年目〉また玉葱を植える季節がきた。

しかし、母は転んで背骨を折り、その後、神経痛も病んでベッドから起き上がれなくなった。畑の事を聞いても「何も分らん。忘れてしまた」と言うばかり。

母の頭は壊れ始めたのか？ と不安が募る。でも歩けるようになった時、作物が育っている畑を見れば、元の母に戻ってくれるのでは……。

祈るような思いで一人で苗を植えた。草取りもした。

春。余所の畑では大きく育った玉葱が土から顔を出しているのに、我が家では、その半分の大きさもない。

「お礼肥をやったかな」

畑を見て、近所の人を教えてくれた。

作物を収穫したあと「育ててくれてありがとう」の思いを込めて肥料をやり、土を元気にしてやるのだという。初心者私にも立派な野菜が作れたのは、母が毎年しっかりとお礼肥をしていたからだだったのだ。

「お礼肥」なんと優しさに満ちた言葉だろう。

母は、お礼肥の事を何も言わなかった。すでに物忘れが始まっていたのか……。

暗くなりがちの私の心に、この優しい言葉がゆっくり沁み込む。

優しさに触れた時、人の心は癒される。

分っているのに、何を聞いても「分らん。忘れてしまた」と答える母に思わず「しっかりしてよ」と声を荒げてしまうことがある。

今は亡き父と共に養鶏業を営み、朝から晩まで働き通して子供達を育ててくれた八十四才の母。長年の労働で背中曲がり、頼りないほど小さくなった母へのお礼肥は、

(壊れかけた母をまるごと受け入れる) ことだ。

だが、「あっ。また言ってしまった」と胸の内で自分を叱りつけている私がいる。